

論文題名: 日常的攻撃行動尺度の検討 ―Big Five、怒り表出傾向、文化的自己観との
関連から―

主査教員名: 桐生 正幸

研究科・専攻・学年: 社会学研究科・社会心理学専攻・博士前期課程 2 年

氏名: 石橋 加帆

研究目的:

従来の攻撃性の測定において、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（日本版 BAQ：安藤ら，1999）がよく用いられてきた。しかし、その行動側面を測定する概念は身体的攻撃、言語的攻撃のみであり、それらを測定する項目には、現在の日常生活において行われている軽微な攻撃や、物に対する攻撃、SNS を用いた攻撃は含まれておらず、日常生活場面における攻撃行動を捉えきれていないことが考えられた。そのため、日常生活における攻撃行動を測定する尺度を作成する必要があるとし、石橋・桐生(2019)は「直接的対人攻撃」「間接的対人攻撃」「対物的攻撃」の 3 因子からなる日常的攻撃行動尺度を作成した。しかし、日常的攻撃行動尺度の交差妥当性や諸変数との関連は明らかではなく、妥当性および信頼性の検討はまだ不十分である。そこで、本論文では、日常的攻撃行動尺度を実証的に使用できる尺度とするために、日常的な攻撃行動と性格の 5 因子モデル、怒り表出傾向、性別、文化的自己観との関連を明らかにすることを通して、妥当性および信頼性を検討することを目的とした。

論文構成:

研究 1 では、日常的攻撃行動尺度が攻撃行動を測定できているか、また、異なる集団においても同様の因子構造が得られるかを検討した。次に、研究 2 では、研究 1 で石橋・桐生(2019)と異なる因子構造が得られ、項目の内容に問題があると考えられたため、項目の修正を行い、日常的攻撃行動尺度改訂版を作成した。最後に研究 3 では、日常的攻撃行動尺度改訂版において異なる集団でも研究 2 と同様の因子構造が得られるか、また、本論文で問題としていた日本版 BAQ と日常的攻撃行動尺度改訂版にどのような違いがあるのかを検討した。

調査概要:

研究 1 では、検証的因子分析による日常的攻撃行動尺度の交差妥当性と、性格の 5 因子モデルおよび怒り表出傾向との関連を明らかにすることによる併存的妥当性の検討を行った。日常的攻撃行動尺度、Big Five 尺度短縮版(並川ら, 2012)および STAXI 日本語版(鈴木・春木, 1994)の怒り表出尺度を用いて調査を行った結果、まず、日常的攻撃行動尺度の交差妥当性が十分ではないことが明らかとなった。ただ、性格の 5 因子モデルおよび怒り表出傾向と日常的攻撃行動尺度の間に先行研究と同様の関連がみられたことから、併存的妥当性は満たされていることが示された。

次に、研究 2 では、研究 1 で日常的攻撃行動尺度の交差妥当性が十分ではなく、攻撃時

の状況が曖昧であることがその要因であると考えられたため、項目の修正を行った。項目は石橋・桐生(2019)の予備調査のデータを参考に、4つの攻撃時の状況と23個の攻撃行動を組み合わせて作成され、それらを用いて調査を行った。その結果、直接的攻撃、対物攻撃、間接的攻撃の3因子からなる日常的攻撃行動尺度改訂版が作成された。

最後に、研究3では、検証的因子分析による日常的攻撃行動尺度改訂版の交差妥当性と、日常的攻撃行動尺度改訂版、日本版BAQおよび文化的自己観のそれぞれの関連を明らかにすることによる日常的攻撃行動尺度改訂版と日本版BAQの差異の検討を行った。日常的攻撃行動尺度改訂版、日本版BAQ及び相互独立的一相互協調的自己観尺度(改訂版)(高田ら, 1996)を用いた調査を行った結果、まず、日常的攻撃行動尺度改訂版の22項目において交差妥当性が満たされていることが示され、内的整合性も十分なものであった。また、3つの尺度のそれぞれの関連から、日本版BAQに含まれる行動は他者との調和を気にしないような自己主張性の高い攻撃であるが、日常的攻撃行動尺度改訂版に含まれる行動は他者や集団を気にして調和を乱さないように自己主張性を抑えたものであり、両尺度で測定される攻撃は質が異なるものであることが示唆された。

以上の3つの研究を通して、直接的攻撃、対物攻撃、間接的攻撃の3因子からなる日常的攻撃行動尺度改訂版(22項目)が作成され、尺度の交差妥当性、併存的妥当性、弁別的妥当性、内的整合性が満たされていることが確認された。そして、日常的攻撃行動尺度改訂版において測定される攻撃行動は、他者を気にして自己主張性を抑制したものであることが示唆された。

結論:

日常的攻撃行動尺度(石橋・桐生, 2019)を実証的に使用できる尺度とするために、日常的な攻撃行動と性格の5因子モデル、怒り表出傾向、性別、文化的自己観との関連を明らかにすることを通して、妥当性および信頼性を検討することを目的とした。その結果、石橋・桐生(2019)とは異なった因子構造が得られ、交差妥当性が満たされていないこと、性差、性格の5因子モデルおよび怒り表出傾向との関連によって併存的妥当性は満たされていることが示唆された。次に、項目の修正、追加および選定を行った結果、石橋・桐生(2019)と同様の直接的攻撃、対物攻撃、間接的攻撃の3因子構造をもつ日常的攻撃行動尺度改訂版が作成された。最後に、日常的攻撃行動尺度改訂版の22項目において交差妥当性が満たされていること、日常的攻撃行動尺度改訂版、日本版BAQおよび相互独立的一相互協調的自己観尺度(改訂版)それぞれの関連から日常的攻撃行動尺度改訂版で測定している攻撃と日本版BAQで測定している攻撃は質が異なるものであることが示唆された。以上より、3つの研究を通して、日常的攻撃行動尺度改訂版の内的整合性、交差妥当性、併存的妥当性、弁別的妥当性が満たされていることが確認され、これで測定される攻撃は、他者の評価や他者との関係を気にする傾向があったり、不安傾向が高く心配性である場合に主張性を抑制した形で表出される行動であることも示唆されたところである。